

## 一般臨床群における心理相談室への被援助中断に関する探索的研究

Dropout and related factors in general psychological counseling

上坂 緑

Midori Kamisaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：カウンセリング，中断，M-GTA法

Key words : Counseling, Dropout, Modified Grounded Theory approach

## 1. 研究目的

クライアント（以下CI）がカウンセリング（以下Cog）を経てどのような変化が起きたら終結とするか、終結の指標は学派や各セラピスト（以下Th）個人によって異なる場合も多い。終結の指標を大きな枠組みで捉えている臨床家もいれば、非常に細かい視点で終結の指標を定めている臨床家もいる。共通しているのは、対人関係に良い変化が起こるとしている点や、環境への適応が良くなる点、自己成長がなされた点であると考えられる。これらの指標が達成されないうちにCogを辞めたなら中断といえるが、中断の定義も研究者によって異なり、CIの抱える問題が解決・改善する前に利用を中止することを指す場合や、回数または期間によって定義する場合もある。心理療法は他のメンタルヘルスサービスよりは低いものの、それでも5分の1は中断していることがSwift & Greengerg(2012)では示されていた。諸研究者らがこれまでに中断要因に関して研究してきたが、CIがどのような要因によって中断を選択するのか、CI視点からの研究は少数であるため未だ不明瞭な点もある。よって本研究では、CIの視点からCogの中断要因を明らかにし、その要因を取り除く取り組みを考察することを目的とした。

本研究では横田（2016）が定義した①おおよそ10回までに②Th及びCIが合意した目標に達成しない時点で、③CI自らが利用をやめることを中断と定義とした。Cogにおける中断の可能性が最も高いのは初回面接後であろうことを踏まえ、本研究においては幅広い中断例を研究するため、また一度のCogでの中断であってもCI側からすればCogを体験したと認識されると考えたため、あえてCog回数の下限は定めずに研究を行った。

## 2. 研究実施内容

## (1) 方法

調査期間：2018年7月～12月

研究協力者：スクールCog及び学生相談を除く一般のCogルーム，またはクリニック併設のCogルームでのCog中断した経験のある一般臨床群5名

表1 研究協力者のプロフィール

研究協力者	年齢	性別	ケース1			
			機関	Th特徴	回数	Cog時年齢
A	20代前半	女性	クリニック併設	男性	1回	20代前半
B	20代前半	女性	個人営業	男性30代前半	6, 7回	20代前半
C	20代前半	女性	個人営業	女性5, 60代	1回	10代前半
D	50代後半	女性	個人営業	男性50代	4, 5回	50代前半
E	30代前半	女性	クリニック併設	男性40代	12回程	10代後半
			クリニック併設	女性4, 50代	20回前後	20代前半

調査方法・内容：中断した当時の心境や状況に関する半構造化インタビュー。加えて作業同盟目録クライアント版，心理的距離評定尺度への回答に基づく質問をインタビューした。

## (2) 結果

計量テキスト分析においては、特筆すべき結果が出なかったため結果の記述は省略する。

M-GTA法による分析の結果、7個の大カテゴリーとその下に14個の中カテゴリー、さらにその下に29個のサブカテゴリーが生成された。尚、大カテゴリーは< >、中カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは【 】、概念は『 』で表す。

まず、CIがCog中断に至るまでの時期を、大きくCog前、Cog中、Cog後とした。中断に至るまでの過程は<1. Cog前><2. 第一印象><3. 関

係性><4. 技法><5. 決定的な亀裂><6. 中断><7. 中断後振り返って>と7つの段階に分かれている。

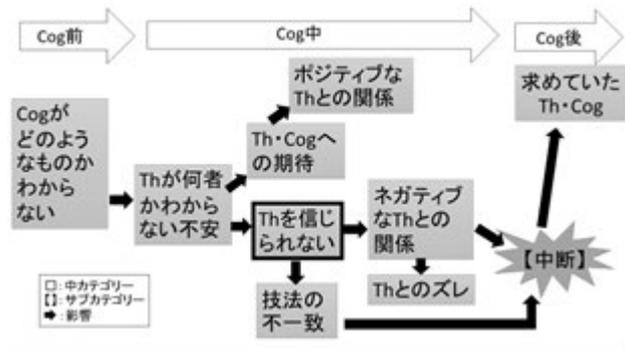


図1「CI視点の中断に至るプロセス」結果簡略図

<1. Cog前>, CIは《Cogがどのようなものかわからない》不安を抱えており, それは解消されないままCogに臨むこととなる. Cogが始まると, <2. 第一印象>として自己紹介の無さや名乗ってくれないことから《Thが何者かわからない不安》を抱き, それにより始まる前から抱いていた不安はさらに高まるが, CI視点でThをアセスメントしていくことにより, 《Th・Cogへの期待》を高めていき, 《ポジティブなThとの関係》を築いた瞬間も中断例の中に存在した. しかしそれとは反対に, アセスメントやThからの非共感的であったり非受容的な態度・言動により《Thを信じられない》と判断する様子も示される等, 場面や時期, CIによって様々な<3. 関係性>がThとの間に構築されていった. しかし, 《Thを信じられない》ことからCIとThの関係性は崩れていった. 《Thを信じられない》中で<4. 技法>が自分には合わないとCIが勇気を出して伝えたにもかかわらずTh側の技法が変わらなかつたりと, 《技法の不一致》を訂正出来ず, CIは諦めを抱きながら中断を選択しようかと考えるようになっていった. つまり, 《Thを信じられない》故に<5. 決定的な亀裂>は生まれていった. 自身の事をわかってきていない感覚や, お互いの共通認識ができていない《Thとのズレ》が浮き彫りになっていった点も, 《ネガティブなThとの関係》を増長させる一因であった. 結果《ネガティブなThとの関係》は加速し, 《Thとのズレ》はCogにおける方針のみならずCIの, CIが望む方向ではなくThが望む, CIはこうあるべきだという方向に進まなければいけないのだら

うかという感情や, ThはCIがCogをどのように捉えているかわかっていないであろう, それ故ズレが生まれているのだらうとCIに不信感を抱かせることとなった. そのような《ネガティブなThとの関係》から, CIは怒りや傷つきを抱えながら【中断】を選択していった. しかし, 時間を置いて<7. 中断後振り返って>みると, Cogとは自身が体験したような辛い体験ではなく, 本来は助けとなるようなものであるべきなのだ『中断を経ての気づき』があり, そこから本当に自分が求めていた応答や求めていたTh像に気が付き, 《求めていたTh・Cog》とは何だったのか理解し, もう一度Cogにチャレンジしてみようという気持ちが起こっていったり, 振り返って冷静に傷ついた体験を見つめなおす作業を行うことが可能となった.

### 3. まとめと今後の課題

以上より, CIがCog中断を選択するまでの過程とその要因が推測された. 本研究においては要因の中でも特に<3. 関係性>の中の《カウンセラーを信じられない》という中カテゴリが最も他のカテゴリや概念に影響を与えていたため, Cogの中断において重要な要因であると推測された. Cogは個人差が大きいため, 一概にこのような方法を取れば中断は起きない, と断じることは難しいが, 肯定的・受容的・共感的態度を崩さず, アセスメントを丁寧に行ったり, スーパーヴィジョンをしっかりと受けるといった基本に忠実なCogを心掛けることが必要なのではないだろうか.

今後は研究協力者をより多く募集し, 全員をまとめた分析だけでなく個人内の分析も行うことにより, また新たな視点を得ることが可能となるであろう.